

そよかぜ

通信



●巻頭言	2
「おもいでをいっぱいありがとう」	2
実践事例	
「授業革新」——根岸発未来へのチャレンジ——	8
東京都台東区立根岸小学校 主幹教諭 大島 賢	
授業実践	
友達とかかわりながら、 よりよい課題を見出す 子どもが育つ授業……	12
岩手県盛岡市立仁王小学校教諭 鈴木 雅幸	
こだわり館嘆符! ⑥	16
北海道博物館 (札幌市厚別区) ……	16



笹岡 隆甫 華道「末生流笹岡」家元

おもいでを
いっぱい
ありがとう

おもいでを いっぱい ありがとう。

女の子のとびっきりの笑顔に思わずひきつけられました。手には、花の落ちたアサガオのつるで作ったリース。「せいかつ」の教科書に載っていた一枚の写真です。

夏休みの自由研究で、アサガオを育てたことを今でも覚えています。早起きして一番にするのは、アサガオの水やり。毎日写真を撮って、観察日記をつけました。一緒に育てたヘチマをタワシにして、お風呂で自分の身体を洗いました。

アサガオのつるに、ヘチマの実。手をかけて育てた植物は、子どもたちにとって宝物。それらは命を終えてなお、キラキラと輝いています。

国際社会の中で生き抜くために、語学力はもちろん、情報処理能力、論理的思考能力といった学力の向上は至上命題であり、教育の重要な役割です。ただ、このように命に触れる時間もかけがえのないものです。

伝統文化を教育に取り入れるべきだ。この提言については、おそらく異論はないでしょう。

自国の文化に対して関心が低いと言われる日本人。グローバル化がますます進む中で、自国の文化を自分の言葉で語ることが求められています。教育現場で伝統文化を学ぶことがその一助になると考えられます。

平成20年に中学校学習指導要領の改訂が告示され、武道・ダンスが必修となりました。ここで、武

道が必修となったことは好ましいことです。

精神性を大切にする傾向は日本固有のもので、いけばなや茶の湯に限らず、身体を動かすスポーツでも同じです。英語の sports は、気晴らしを意味する disport を語源としますから、西洋のスポーツは余暇を楽しむのが主目的。これに対し、剣術や柔術といった日本の武術は「礼に始まり礼に終わる」と言われる通り、精神的な鍛錬が重要視されました。洋の東西を問わず、肉体や技術を鍛えるのは変わりませんが、日本では武術を通して、自身の生き方を見つめ直すことがより上位の目的とされたのです。

また、日本では、いけばなを華道、茶の湯を茶道、剣術を剣道、柔術を柔道などと、文化や武術にしばしば「道」という字を添えて表記します。我々が「道」という字を付してこれと呼ぶとき、そこには、先人の「道」を辿る＝先人の知恵に学ぶという謙虚な姿勢に加えて、その道を歩む中で人としての「道」を究める＝人生の指針を得るという哲学的な側面が読み取れます。

さて、私は、武道に加えて、伝統文化、特に“いけばな”を加えることが急務であると考えています。それは、いけばなが唯一、命に直に触れる伝統文化だからです。

いけばなを学ぶことで得られるものは、きっと皆さんの想像以上に多い。「いけばなが日本の未来を拓く」と言っても、過言ではありません。ここでは、伝統文化いけばなを学ぶことの意義を探ってみます。

命に直に触れる

いけばなの特殊性は、花が生き物であるという点にあります。数ある伝統文化の中で、命に直に触れるのは、いけばなだけです。花に触れることが、子どもたちに与える影響は計り知れません。

ある幼稚園の理事長は、「花の世話ができない人は、幼稚園の先生にはなれない」と常々口にします。花は、ベットのようには吠えて飼い主に訴えかけることができません。



水が足りない。エアコンの風があたって乾燥する。そんな声にならない声にきちんと耳を傾けなければ、花はすぐに枯れてしまいます。同じように、自分たちの気持ちを言葉で正確に伝えることができない子どもたちの声にならない声をきちんと聞かなければ、幼稚園の先生は務まらないのだ、と。これは、幼稚園の先生に限ったことではないのかも知れません。将来、親になるすべての子どもたちが、花の世話ができる人間であってほしいものです。



二 日本がわかる

私はいけばなの家に生まれました。前家元には娘が二人いますが、二人とも嫁いだため、長女の長男にあたる孫の私が祖父の養子に入り、次期家元として育てられました。普段の生活は両親と一緒にですが、

妹弟を含めた五人家族の中で、私だけ苗字が違うという少しだけ変わった家でした。

三歳から祖父にいけばなの技を徹底的に叩き込まれ、繰り返し繰り返し古典の型を学びました。一方、数学者である父に「進路は自分で決めるもの」と導かれ、物理と美術が好きだった私が選んだのは建築の道です。ところが、大学で日本建築史を学ぶ中で、左右非対称の美や異なる三要素の調和といったいけばなの美の法則が、建築をはじめ、他の日本文化とも共通することを知りました。とすれば、そこに日本文化の特質に迫る鍵が隠されているはずです。

いけばなの世界を外から見ることで、いけばなを学ぶことは「日本を知る」ことにつながるのだと気づきました。そして、幼い頃より身体で覚えてきたいけばなを「論理的に説明すること」が私のライフワークとなったのです。



撮影：岡本隆
画像提供：スバイラル／株式会社ワコールアートセンター

日本の情緒を海外の方に言葉だけで説明するのは少々厄介ですが、視覚に訴えるいけばなは受け入れられやすい。しかも、いけばなに必要なのはセンスではなく、論理的思考能力です。いけばなの伝書には「主要な花枝の長さは1:√2の比率になるようにととのえる」といった具合に、花を美しく見せるための具体的な手法が理詰めで紹介されています。いけばなの美は、数学のように緻密に計算し尽くされたものですから、海外の方でも容易に理解できます。

いけばなを学べば、日本文化の特質、そしてその背景にある日本人の情緒を、海外に向けて明快に解説できます。



日本人の自然観

日本人の自然との向き合い方は、西洋とは少し異なります。住まいを見てもそれがよくわかります。西洋では、強固な壁で生活空間をぐるりと囲みます。住まいは厳しい自然から身を守るシェルターです。これに対し、柱と梁でできた日本の住まいは、建具を取り払ってしまうと、屋内と庭が一体になり、まるで自然の中で暮らしているかのようです。日本人にとって、自然は、対峙する脅威ではなく、共存すべき身近な存在でした。秋に豊かな実りを与えてくれる自然を敬い、感謝をしてきました。

こうした自然への向き合い方が、モノへの敬意、そして他者への思いやりにつながっていきます。震災の後にも暴動が起きず落ち着いて行動する被災者の方々、ワールドカップで負け試合にも拘わらず掃除をして帰るサポーター……。そんな日本人の姿勢は、そこから始まっています。

日本人は古くから四季の移ろいに敏感で、花を愛してきました。それは、現存最古の歌集である『万葉集』にハギやウメなど一六六種の植物が詠まれていることからもうかがい知れます。これほど花を愛したのは、日本人ならではの豊かな感性によるものでしょうが、その背景には、美しい四季を持つ日本という国土の特殊性があります。確かに四季のある国は他にもありますが、その繊細さにおいて日本は



別格と言えます。秋のカエデの色づき一つとってみても、すべてが均一に紅葉することはありません。青から黄、紅へと移りゆく微妙な色合いには、えも言われぬ趣があります。

温和な気候、小規模な山河、四季の変化、限られた生産、海による大陸との隔離といった日本の国土の特殊性は、わが国独自の自然観を育み、優しく洗練されたデザインを好む日本人ならではの情緒を育みます。



四 いけばなはアートではない

いけばなはアートであると誤解されがちです。もちろん、花を用いて美を創出するアートという側面を全く持っていないというわけではありませんが、少なくともいけばなの本質ではありません。

まず、華道家にとって花は、自己表現の道具ではありません。いけばなでは、花材が本来持っている美しさを引き立たせるのが主目的。ですから、華道家の意図よりも花の個性を優先します。例えば、構想段階では太陽に向かって伸び上がるようなデザインを考えていたとしても、崖にかかったように垂れ下がる枝が手に入れば、その枝のおもしろさが生き

るデザインに修正します。

また、華道家は花に手を加えますが、自然の美を否定しているわけではありません。いけばなは自然の風景の縮図、いわば自然のミニチュアです。自然の美を愛するからこそ、その姿を器の中に再現したいと考えるのです。花に手を加えるのは、自分の個性を花に押し付けるためではなく、その花固有の美を引き立たせるためです。あくまで主役は花であり、華道家は歩引いた黒衣の役割に徹します。

こうした日本人の花との向き合い方は、人との向き合い方にも通じます。個性重視の世の中は限界にきています。モノやヒトを尊重する日本人の姿勢を思い出すべき時です。

五 不完全を尊ぶ

伝書『仙伝抄』（一四四五年）には「右長左短」や「左長右短」という言葉が見られます。左右のうち一方を長くすれば他方は短くせよ、つまり左右非対称のデザインにしろなさいというのです。

いけばなでは最初期から左右非対称を意識していたわけですが、この傾向もいけばなに限ったことではありません。左右非対称は、日本建築の特徴でもあります。その好例は、世界最古の木造建築である法隆寺の西院伽藍。金堂と塔を左右に並べて配置しており、上手側には低く横幅のある金堂がどっしりと腰を据え、下手側には高く伸び上がる五重塔がそびえています。永遠性を重んじる宗教建築は左右対称が原則ですから、日本でも左右対称の伽藍配置が多いのですが、ただ、その中に法隆寺のような非対称の伽藍配置が見つかることが異例なのです。日本人が左右非対称を好み、あえてそうしたデザインを用いたと考えられます。もちろん、西洋にも左右非対称の建築はありますし、日本建築にも左右対称はあるのですが、「日本人が左右非対称を好む傾向にある」というのは確かなようです。

この背景には、日本人の理想とする人間像が影響を与えていると私は考えています。西洋ではダヴィンチのような完璧な人間が理想と考えられます。しかし、日本人は不完全なものに美を見出し、長所と

短所をあわせ持つのが人間らしいと考えてきました。自分自身に弱点があるからこそ、他人の痛みがわかり、互いに助け合い、補い合う。思いやりやいたわりの気持ちも生まれてくるのだ、と。

六 先人の知恵を学ぶ

花のいけ方に唯一解はありません。好みは人によって異なるからです。

自然にあるがままの姿を写した素直な作品を美しいと言う人もいますし、そこに人間の手が加わって隅々まで手入れが行き届いた花姿に美を感じる人もいます。また、時代によっても人の好みは変化します。いけばなに数多くの流派が存在し、時代の要請に応じて次々と新しい花のいけ方が開発された事実が、それを物語っています。

正解が一つに絞れないのなら、気のおもむくまま、自由にいけても一向に構わないはずです。ところが、いけばな教室では「自由にいけてよい」と言われることはきわめて稀です。

いけばな教室で最初に教わるのは、「型」と呼ばれるいけばなの設計図。型は各流派に固有のもので、素人目には判断しづらいのですが微妙に異なります。これらの型は、師匠から弟子へと何代にもわたって試行錯誤を重ねる中で編み出された、先人の努力の賜物です。型を知れば、この何百年分の先人の努力の蓄積が自分のものになるのですから、これを学ばない手はありません。型は、唯一解でこそありませんが、大多数の人たちから美しいと認められた一つの答えです。

一般のイメージとは相反するかも知れませんが、いけばなにセンスは必要ありません。入門して最初に学ぶのは「型」、すなわち先人が考案したいけばなの設計図です。この設計図通りに花を組み立てていけば、誰にでも美しい花がいけられます。いけばなは、気の向くままにフリーハンドで描く絵というよりも、設計図に従ってパーツを組み合わせるプラモデルに似ています。

また、型は、伝書が説くさまざまな美の法則を縦横無尽に駆使して作り上げた、知恵の結晶です。で

すから、たとえ伝書の内容を隅から隅まで網羅して
いなくても、型さえ身につけておけば美しい花がい
けられるわけです。型を学ぶことは、美しい花をい
けるための唯一の近道なのです。

従って、センスがないのでいけばなには向かない、
という考えは間違いです。誰もが美しい花をいける
ことができるよう先人が残したのが、いけばなの設
計図である型です。型を考案したのはかつての花の
名手たち、すなわち道を極めた男性たちですから、
我々が花をいけるときに用いるのは、その先人のセ
ンスということになります。そこには、自分自身の
センスを発揮する余地はありません。

ただ、型に囚われると、発展がありません。まず
は型を学び取り、優れた先人のセンスを自分のもの
にします。そして、それを基に、自分なりの知見を
加えて、新たなものを作り出していくのが最終目標
です。つまり、型破りを目指すわけです。そのため
にも、土台となる型は、正確にしっかりと学ぶ必要
があります。

まずは、じっくり時間をかけて、型を習得してか
ら、はじめて自分の色を出す。とすると、すぐに
結果を求めがちな現代社会ですが、いけばなは、先
人の知恵を学ぶことの大切さを教えてくれます。

七 フラワーアレンジメントとの違い

花芸術は世界中にあります。しかし、日本のいけ
ばなは、西洋の花芸術とは、少し違います。西洋の
花芸術は、最高の瞬間を演出するもの。例えば、結
婚披露宴の装飾をする場合、盛りを迎えた満開の花
をたくさん足していった、花のカーペットを作ります。

これに対し、いけばなでは「蕾がちにいけよ」と
教わります。開いた花があってもよいけれど、必ず
蕾を残していけ上げる。蕾が徐々にほころび、盛り
を経て、やがて凋落を迎える……。そんな時間経過
とともに刻々と変化する花の命を最後まで見届ける
のがいけばなです。

花の命の移ろいを最期まで見届ける中で、花から
さまざまなことを教わります。太陽の方を向いて咲



く花から、逆境でも前向きであること、向上心を持
って生きていくことを。蕾が開く様子から、時を經
ること、年を重ねることの素晴らしさを。

これは、日本人が中世以来培ってきた「無常観」
にも通じます。「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、
もとの水にあらず」という鴨長明『方丈記』の世界
観です。永遠性を追求し完璧なものに美を感じ取る
西洋の姿勢に対し、移ろいゆくはかないものにこそ
美を感じる傾向を日本人は今も持ち続けています。

八 時の移ろいを愛でる

移ろいは、日本のものづくりにおいて大切にされ
ている考え方です。日本人は、時間経過とともに変
化することを考慮に入れて、ものをデザインします。

庭園のデザイン手法を見ても、西洋と日本では同
じような違いがあります。

西洋庭園は、整然と並んだ幾何学的な構成が特徴
です。ヴェルサイユ宮殿の庭園を見れば、中心軸の
片側に丸く刈り込んだ植栽があれば反対側も円形
に、四角く刈り込んだ植栽があれば反対側も四角形
に、といった具合で、厳格なまでにシンメトリー（左
右対称）にこだわっています。この場合、庭園がで
きあがった時点が最高の状態であり、植物が成長し
てこの規格からはみ出すと、完成された美が壊れて
しまいます。時間の経過が、安定した美しさを壊す
のです。ですから、常に刈り込んで元通りに成型し



直す手入れが必要です。

一方、自然を手本とする日本庭園は、時とともに植物が成長することを予め考慮に入れてデザインします。松の木の十年後、二十年後、そして百年後の姿を思い描きながら造園するのです。たとえ想定した成長の仕方と違ったとしても問題はありません。成長した松は、庭ができあがったときとは異なる新たな美を持っています。その新たな美を際立たせるように、また手を入れてやればよいのです。

日本人は、自然の移ろいを否定的に捉えるのではなく、時間経過とともに新たな美が創出されると考えたのです。

これは、日本のデザインは懐が深いことを示す好例です。かつて日本人が当たり前のように学んできた“柔軟な対応力”。それをもう一度共有することが、“ものづくり日本”復権の契機になりえると私は考えています。ウォークマンは作れたけれど、iPhoneには間接的な影響を与えることしかできなかった。日本が今一度、世界のトップランナーとなるために、すべての日本人が日本のデザインの強みを再認識する必要があります。

九 いけばなの未来のために

いけばなの未来のために、私は今、二つの目標を掲げています。

一つめは、冒頭から述べてきた通り、いけばなの義務教育化を推進すること。具体的には、学習指導要領への記載を実現させたい。命に直に触れる唯一の伝統文化をすべての日本人に学んでほしい。そして、その柔軟な対応力も身につけてほしい。

そして二つめは、2020年、東京オリンピックで、日本のいけばなを世界に向けて発信すること。「開会式では、華道家による花手前を^{はなてまえ}」、「花束贈呈は、和紙を折っていけばなを包んだ^{はなつつみ}“華包”で」と夢は広がります。いけばなを世界に向けてアピールする

と共に、すべての日本人に、自分たちにとって花は特別な存在であることを、今一度思い出してもらいたい。

あるフラワーデザインスクールの校長が、こんな話をしてくれました。日本のフラワーデザイナーが海外で作品を披露すると、IKEBANAだと言われる。西洋由来のフラワーデザインでさえ、日本人の手にかかるとうるさくになる。これは、フランス人の料理や、オーストリア人の音楽のように、日本人の“花”は特別なものと理解されている証拠だ、と。

日本人にとって、花は自己表現のための“道具”ではなく、我々に多くのことを教えてくれる“師匠”です。そして、そんな日本人の花との向き合い方は、世界では尊敬の念をもって支持されています。いけばなは、単なる花芸術ではなく、哲学でもある。いけばなを通して、より一層日本という国に誇りを持ってほしいと切に願います。

笹岡隆甫 (Ryuho Sasaoka)

昭和49(1974)年、京都生まれ。華道「末生流笹岡」家元。京都大学工学部建築学科卒、同大学工学修士。2011年に家元を継承。伝統を守り続ける一方、国内外で花手前（いけばなパフォーマンス）を披露するなど、新たな可能性を追求している。メディア出演も多く、穏やかな人柄や語り口で人々に親しまれている。京都ノートルダム女子大学客員教授、(公財)日本いけばな芸術協会常任委員、京都いけばな協会常任理事などを務める。



撮影＝久保田康夫 (STUDIO BOW)
「婦人画報」(ハースト婦人画報社)2013年1月号掲載写真

「授業革新」－“根岸発”未来へのチャレンジ

東京都台東区立根岸小学校主幹教諭

大島 賢

【学びを生活へ】

朝や業間の時間に、私が教室内で保護者の方からの連絡帳を読んだり、連絡文を書いたりしていると、突然教室が消灯されることがある。「先生、もう時間です」時計を見て、はっとする。朝礼に向かう時間であったり、専科授業のために教室を移動する時間であったりするからだ。気がつくと、子どもたちは教室移動のために整列している。担任が何かしらの仕事をしているのを承知の上で消灯する子どもたち。

給食の時間に、頻繁にこのような光景を目にする。

「残菜はだめだよ。これはゴミになるんだから」

これには、食育以外にも道徳性が絡んでくるが、「残菜＝廃棄処分」という図式が子どもの頭の中にはあるのだろう。

小学校生活最後の総合的な学習の時間「10年後を生きる私たちへー今からできる環境への取り組みー」は、地球環境問題の現状と今後の問題について考え、地球環境や生態系の保護や保全について、自分の生活や将来と結び付けて考え、持続可能な社会づくりに積極的に参画していこうとする実践的な態度の育成をねらいとしている。

本活動に入る前に、校長からは「崇高な考えは、必要ない。遠い世界のゴミ問題を考えつつ、目の前に落ちているゴミを拾えるようになってほしい」というアドバイスを受けた。環境問題は、複合的な要素が入り組んでいて、答えが1つに定まらないために、どうしても「批評的」、「評論家的」な活動になってしまうことが多い。

本校では今年度、「授業革新」を掲げ、各教科等において授業を根本的に見直す作業に取り組んでいる。「改善」ではなく、「革新」である。この根底にあるものの1つとして、「子ども観の転換」と「集

団観の転換」がある。前者においては、子どもという存在は本来的に学びたい、できるようになりたいと願う存在として捉え、チャレンジ要素のある学習活動を望んでいるということである。これは、子どものレベルを低く見ないという考えがその基盤にある。後者は、同調行動をするだけのグループ活動ではなく、共に学ぶ仲間がもたらす学習に対する意欲付けを相互に機能させることである。

この2つの考え方の転換をもって学習材の準備をし、提示することができれば、解決への道筋が見えない課題に対しても一人一人が最適解や納得解を導き出すことができ、そして前述の校長のアドバイスにあるように、「崇高な考え」をもつのみで終わるのではなく「遠い世界のゴミ問題を考えつつ、目の前のゴミを拾うことができる子ども」、「Think globally, Act locally」地球規模で考え足元から行動する子どもが育てられるのではないかと考えた。「学んだことを生活に生かす」…根岸小学校6年生の未来へのチャレンジが幕を開けた。

■ 課題との出会い

「えーっ！トランシーバーみたい」

トランシーバーという言葉を知っているということにも驚いたが、ほんの10年ほど前に使用していた携帯電話も、現在の子どもたちから見るとそのようにうつるようである。

総合的な学習の時間においては、常に課題との出会いを大切にしている。そこに驚きや、矛盾点・疑問点など「ダウト」がかかると、子どもは瞳を輝かせながら夢中になって「なぜだろう?」、「わかりたい」、「調べてみたい」と活動が始まっていく。本活動においては、これから10年先の地球環境を考える上において、10年前の携帯電話を提示するところから活動を始めた。10年前・8年前・6年前と、現在

のスマートフォンを比較して見ることで、この10年の間に技術革新が絶え間なく続いていることに気付く、「この先の10年では、どんな世の中になるのだろうか?」と、一人一人の児童が予想をすることにした。その際に、その考えの根拠を明確にして予想することを共通課題とした。すると、5年生の社会科で学んだ「わたしたちの工業生産と工業地域」におけるハイブリッド自動車や水素自動車の開発や、同じく「情報化した社会とわたしたちの生活」におけるメディア・リテラシーを身につけた責任ある「個」が医療・教育・防災・交通などでつながることができる世の中の進展という予想が多かった。また、同時期に国語科の学習で学んでいた『「持続可能な社会」への取り組みについて調べよう・未来に生かす自然のエネルギー』における、再生可能エネルギーの利用率の向上を予想している子どもも多くいた。10年後の世界への肯定的な意見が多く、このまま活動に入るのでは何の「ダウト」も入る余地がなく「批判的」、「評論的」な取り組みになることになる。

そこで、本校の「学習ゾーン」である上野恩賜公園内にある西郷隆盛像を提示した。児童が普段から見慣れている西郷隆盛像であるが、顔のアップはあまり見ることはない。

「あ、西郷さんが泣いている」涙を流しているように見える西郷隆盛像に子どもたちは驚きを隠さない。

さらに、社会科見学時に撮影した鎌倉大仏の写真の提示。「体のあちこちが、はげてしまっている」

エジプトのピラミッドなど、世界遺産が酸性雨に



社会科見学時に撮影した鎌倉大仏の写真

より被害に遭っているというのは6年理科「ものの燃え方」の学習で触れられてはいるが、生活圏の中で馴染みのあるものにまでその被害が及んでいるということに、子どもたちの切実感が高まっていく。そして、前述のハイブリッド自動車や水素自動車を開発している人々の願いや、医療・教育・防災・交通の情報化を進めている人々の願いについて想像させ、「自分は、地球環境のために何ができるか?」という問いをもたせ、一人一人が課題設定を行った。

「どうすれば、西郷さんの涙は止まるのだろうか?」…そんな子どもの願いや思いを大切に、探究活動が始まった。

② 情報の収集

一人一人が、地球環境問題についてどのような関わりがもてるのかを考える上で、最初に行う必要があるのは、地球環境問題の正確な現状と、これまでの歴史的な経緯である。前述の酸性雨や、森林の減少、絶滅危惧種の増加など、子どもたちの課題は多岐にわたり、それらの情報を収集するために、観察・実験・見学・調査・探索・追体験活動を行うことは不可欠である。

本活動では、地域の図書館から図書資料を100冊ほど借り、地球環境問題の歴史的な背景について十分に調べられる環境を整えた。また、今日的な課題をつかむためにも一人に一台のパソコンを割り当て、インターネット環境を整えた。ここからは、子どもたちの自学・自習になる。

酸性雨を調べている子どもは、実際に雨天時に雨を採集し、理科室のPHメーターを使って雨水の性質を調べたり、空気を入れた試験管と二酸化炭素のみを入れた試験管のまわりを温め温度の変化を比較したり、濃度の違う液体を複数準備して教室内でエルニーニョ現象を再現したりするなど、子どもたちはそれぞれ、自分が向き合うべき地球環境問題にあらゆる角度から関わり、その本質について学ぼうとしていた。

Ⅲ 整理・分析

本校の総合的な学習の時間においては、探究的な学習の中で、思考そのものを指す整理・分析の活動に重きを置いて活動を進めている。本活動では、この段階で2つの活動を行うことにした。1つは、収集した情報についての整理・分析する手段を決定するということである。地球の平均気温の変化や、絶滅危惧種に指定されている個体数の変化の度合いならば統計的な手法を用いてグラフに表したり、身の回りにある酸性雨の影響をまとめるのであれば、マップなどに整理したりするなど、一人一人がその情報に応じて適切な整理・分析の方法を意思決定した。

2つ目は、これまでの活動に「ダウト」をかけ、さらに探究的な活動を深めたことである。情報収集後に学年3クラス95名を5～6人の小グループに分けて「中間発表会」を行った。ここでは、全く異なる課題をもつ子どもどうしてグループ

ングをし、混合性と多様性をもつグループ内でこれまで自分が学んできたことを「聴き合い」、さまざまな課題に関わる共通点に目を向けさせた。

次に、バズ学習

の1種類である「お出かけバズ」(『協同学習入門』杉江修治著・ナカニシヤ出版 P.99～102より)という手法を用いた。これは、「グループである程度意見がまとまった段階で、それをさらに高めたり練り上げたりするために、他のグループに出かけて情報収集をするというスタイル」(同著P.99)の進め方である。グループをAとBの2つに分け、Aグループは他グループの場所で情報収集を行う。Bグループは、他から来る訪問者に対して自分たちの考えを伝える。このことにより、自分たちにはない発想

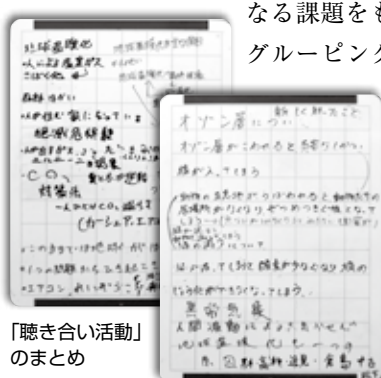
を集めることができたり、説明をしたり質問に答えたりする活動を通して、自分たちの考えをさらに深め広げることができる。この活動を通して子どもたちは、ある共通点を発見することができた。それは、「地球環境問題には、人間の生活様式が深く関わっている」ということであった。そして、どのグループの子どもたちからも、「森林を伐採しているのは、人間だから、これ以上は木を切らないでほしい」「ゴミを焼却すると、温室効果ガスが出るために、なるべくゴミを出さないようにしましょう」と、いった意見が出された。

それではということで、子どもたちに2枚の写真を提示した。1枚めは、今にもあふれそうな「落とし物入れ」の写真。その写真には、鉛筆や消しゴムなどの持ち主不明の学用品が写し出されていた。2枚めは、ある日の給食の食缶の様子である。その写真には、残された中華丼の餡が写し出されていた。少し意地が悪いが、「君たちは、地球問題に対して確かに多くの知識はもっているし、自分なりの考えをもっている。しかし、実際の行動はどうなんだろう？」

この「ダウト」により、子どもたちはこれまで収集した情報の他に、身の回りで自分が取り組むべきことに気づき、新たな情報を収集しだした。それは、次の段階である表現への序章となった。

Ⅳ まとめ・表現

前述した通り「子ども観の転換」を図ったことにより、我々教員は、チャレンジ要素のある学習活動を適切に提示すれば、子どもたちは夢中になって活動し、それを実生活に生かしていくものであるという考えで、子どもたちの探究活動を見守ってきた。ハードルが高いと思われる「ダウト」にしても、課題に対する関心が高まっている段階であれば、子どもたちは「ダウト」の壁を乗り越えることができると確信してきた。それは子どもという存在について、本来的に学びたい、できるようになりたいと願う存在として捉えているからである。



「授業革新」―“根岸発”未来へのチャレンジ



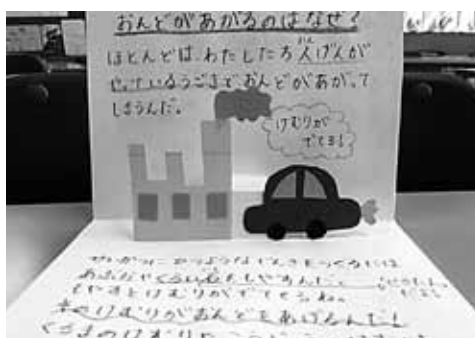
実験の様子

学年全体として、子どもたちはこれまでの活動の中で「知っている」よりも「している」ではないと意味がないということに気付き、そのような雰囲気にもなっている。これが前述した「集団観の転換」である。

子どもたちはそれぞれ、プレゼンテーションソフトやポスター、実験などの手法を使って、探究活動によってわかったことや自分が考えたこと、そして最も大切なこれから自分が持続可能な社会づくりにどのように参画していくかについて、一人一人が発表の準備を行った。その際に、相手意識である誰に伝えるのか？（→友達や家族、地域の方々）ということと、何のために伝えるのか？（→「チーム根岸」として地球環境に関わるため）を明確にした上で作業を行った。

そして、発表後には補充・深化的な活動として、さらに、これからも地球環境問題に意欲的・主体的に関わっていくことができるために、3つの活動に取り組んだ。1つは、実際に地球環境問題に取り組んでいる企業の担当の方をゲストティーチャーとして招き、追体験をしながら考えを深めたことである。このことにより、我々が生きていく上で地球環境への関わりに責任をもって取り組んでいく必要があるという考えを深めることができた。2つめは、将来、持続的可能な社会づくりの「パートナー」になる1年生に向けて地球環境の現状を伝え、それを防ぐために自分がどのような行動をしているかということ

を、リーフレットなどにして紹介したことである。「人にものを教える」ためには、その課題について完全に把握していなければいけないために、子どもたちは追体験したことを基に、新たな相手意識をもち、自分の考えを再構成していった。1年生にもわかる平易な言葉で、わかる内容を伝えることができた子どもたちは、地球環境問題に対して、改めて「自分ごと」として捉え、実生活に生かしていく自信を深めることができた。3つめは、この探究活動で学んだことや自分がこれから地球環境に対してどのように関わっていくのか、そして「みんなで地球環境について本気で考えよう」と本校のホームページ上で、一人一人が提言をした。



1年生に向けて作られたリーフレット

【人生に必要なことは、全て根岸小学校で学んだ】

これは、本校学校長が掲げる教育哲学の根底にあるものである。子どもの提言の中で、「私は、地球温暖化を防ぐために電気や冷暖房をあまり使わないようにします。そのために、私は家にいる時に、家族がバラバラの部屋にいるのではなく、1つの部屋で過ごすように家族に呼びかけます」とあった。

地球環境問題を考えることは、自分の生活様式を考えること。そして、「学び」というものは、生活の中で生きてこそ本物の価値がある。

「人生に必要なことは、全て根岸小学校で学んだ」と胸を張って言える子どもたちが、これから、未来へのチャレンジを始めていくのだと、本活動を終えて強く感じた。

友達とかかわりながら、 よりよい課題を見出す子どもが育つ授業

岩手県盛岡市立仁王小学校教諭

鈴木 雅幸

Ⅰ はじめに

本校では、豊かな自然や歴史文化、温かな地域の方々とかかわりを大切にしながら探究的な学習に取り組んできたことにより、地域へ親しみをもち、すすんでかかわろうとする子どもが育ってきたと考える。その一方で、探究内容が抽象的なために活動が停滞しなかなか深められず、ねばり強く取り組めないでいる子どもも見られる。

このような子どもの課題を解決するためには、子どもの探究に対する思いや願いに寄り添いながらも、よりよい課題を設定し、解決の見通しを明確にしながら活動を深めさせていくことが必要であると考えている。

そこで、本校における学習過程「課題の設定」場面において、友達とかかわりを通しながら、よりよい課題を見出す力を育てたいと考え、本主題を設定した。

Ⅱ 研究の概要

1 研究主題の捉え

本研究における、「友達とかかわりながら」とは、自分が考えた課題や解決の見通しをよりよいものにするために、友達の考えを聞いたり、互いの課題解決に向けてアドバイスしたりする子どもどうしのかかわりのことである。「よりよい課題」とは、「子どもの思いや願いにもとづき、解決への見通し（調べる内容や方法など）を明確にもって探究できる課題」と捉えた。

2 研究の手立て

友達とかかわりながらよりよい課題を見出すために、「課題の設定」場面で次の手立てを組む。

手立て① 自分の考えを可視化する。

手立て② 友達と探究課題を相談しやすいように環境を整える。

手立て③ 自分の考えを最終決定する場を設定する。

Ⅲ 研究の実際

1 単元名

「おじいちゃんおばあちゃんこんにちは」3学年（福祉・伝統文化 42時間）

2 単元の目標

地域のお年寄りとのふれあいを通して、自ら設定した課題を探究しながら、生活の知恵や昔の文化のよさに気付くとともに、お年寄りとかかわり方を考えることができる。

3 単元計画

学習テーマ		(時数)
第1次	聞いてみよう 調べてみよう 昔のこと	(4)
	○子ども会や地域の行事等でお年寄りと交流して、楽しかった経験を振り返る。 ○なかよし交流会を開催し、お年寄りと一緒に遊んだり、話を聞いたりして、昔のことに興味・関心をもつ。 ○昔のことで調べたい課題を設定する。（生活、遊び、食べ物等）	
第2次	おじいちゃんおばあちゃんの知恵袋の中は(18)	
	○お年寄りを招き、同じ課題のグループごとに話を聞いたり質問したりする。 ○調べたことをグループごとにまとめる。 ○知恵袋講習会を開催し、お年寄りを講師に招き、教えていただいたことを実際に体験する。（鉛筆削り、凧作り、だんご作り等） ○グループ交流をして、お年寄りの知恵の素晴らしさを共有する。	

第3次	ありがとう そして これからもよろしく (20)
	○たくさんのことを教えてくれたお年寄りに対して感謝の会を開く計画を立てる。
	○教わったことを活かし、グループごとに協力して感謝の会を行う。
	○これからお年寄りとのようにかかわればよいと考えて実行する。(手紙で交流する, 行事へ招待する, 地区の花壇の世話をする等)

4 単元で育てようとする資質や能力及び態度

【学習方法】

- ア** お年寄りとののかかわりや友達から得た情報をもとにして、よりよい課題を設定することができる。(課題設定)
- イ** お年寄りや友達から課題の解決に必要な情報を収集することができる。(情報収集)
- ウ** お年寄りとの交流で得た情報を共有したり、そこから課題解決に必要な情報を選択したりすることができる。(整理・分析)
- エ** お年寄りとの交流会や感謝の会に向けて、目的や相手に応じた表現方法を選択し、表現することができる。(まとめ・表現)

【他者や社会とののかかわり】

- ア** よりよい内容や方法を決めるために、友達とすすんでかかわっている。
- イ** 活動目的を明確にしてお年寄りと交流している。

【自分自身】

- ア** お年寄りとの交流を通して得たことを振り返り、自分自身やお年寄りとのよりよいのかかわり方を考え実践しようとする。

5 実践授業の内容と結果及び考察

(1) 対象との出会い

単元導入にあたり、総合的な学習の時間はどんなことを学習する教科なのか自由に予想した。子どもたちからは、上級生とののかかわりの中で知ったことや、これまでの生活経験をもとに、「総合っていろ

んなものをまとめるって意味だから、いろんな勉強をするんじゃない？」という意見を皮切りに、「きっといろいろなものの作り方を勉強するんだよ。」「自然のことを詳しく調べると思う。」「たくさんの人と会って勉強するって聞いたよ。」と、さまざまな意見が出された。それらの意見を子どもたちとまとめていくと、総合的な学習の時間は、「いろいろなものや、自然、昔のことなどを詳しく調べ、みんなを笑顔にする学習だ。」とまとめることができた。

このまとめの中にあつた「人とののかかわり」に関連させ、今までどんな人たちとかかわってきたか振り返った。その中で、子どもたちの視点を地域のお年寄りに目を向けさせるため、過去に生活科の授業や地域の行事でお年寄りとかかわっている写真を提示した。すると、「楽しかった。」「優しくしてもらってうれしかった。」という感想が発表され、「もっと一緒に遊びたいなあ。」「もっと一緒にお話をして仲よくなりたいなあ。」という思いが生まれ、その思いを実現させるため、なかよし交流会を行うことを決め、計画・実行することにした。

なかよし交流会では、地域のお年寄りを招き、一緒におはじきやけん玉、お手玉などをして遊んだり、お年寄りが小学生だった時のさまざまなお話を聞いたりしてふれあつた。

交流会後、「おじいちゃんおばあちゃんのように、けん玉やお手玉が上手になりたい。」「もっとたくさんお話を聞いていろいろなことを知りたい。」「また会いたいなあ。」といった学習感想を振り返ったり、「とても楽しかったです。また、みなさんとお話したり、遊んだりしたいです。」というお年寄りからのメッセージ(VTR)を見たりすることで、目的意識や相手意識がより明確となり、お年寄りとののかかわりに対して次のような思いや願いを膨らませることができた。

- 昔の遊びをもっと教えてほしい。
- 昔の仁王小学校のことを知りたい。
- どんなものを食べていたのか聞いてみたい。

(2) 手立ての実際

手立て① 自分の考えを可視化する。

この膨らんだ思いを、可視化し整理できるように、イメージマップに表した。可視化した内容は、お年寄りに教えてもらいたいこと（食べ物、学校の様子、遊び、戦争の事等）と、教えてもらいたい具体的な内容（食べていたおやつは何か、手作りのものはあったか、どのように作るか等）の2点である。このことにより、子どもたちは膨らんだ思いの中から、自分が学びたい事柄が明確になってきた。

手立て② 友達と探究課題を相談しやすいように環境を整える。

次に、自分の考えたお年寄りに教えてもらいたい内容を友達と相談した。子どもは互いが作成したイメージマップや、教室に掲示してあった交流会の写真や振り返りを参考にしながら、自分では考えつかなかった事柄に、「それもいいね。」と反応したり、「こんなことを聞いても面白そうだね。」とアドバイスしたりした。

その後、再度、初めに書いたイメージマップに追記することで、子どもは、自分の学びたい事柄の広がり意識し、次のように探究課題が明確になった。

- 楽しかった昔の遊びと今の遊びを比べたい。
- どんな勉強をしていたか今と比べたい。
- 〇〇さんのように、手作りおやつを作りたい。

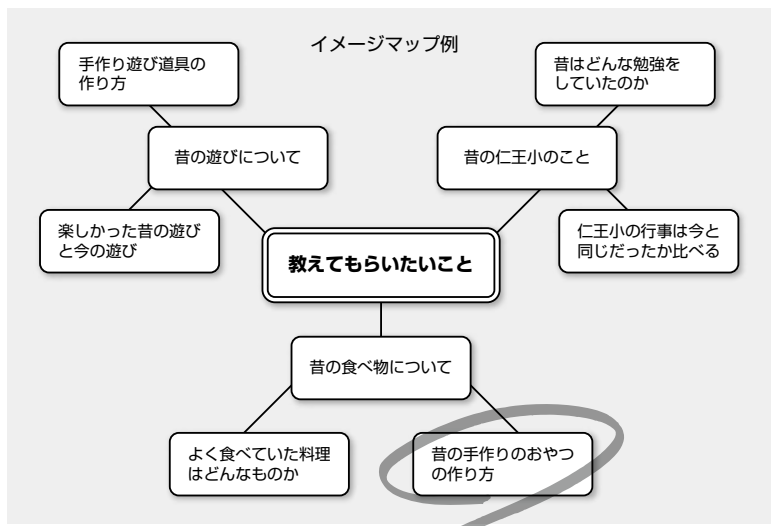
手立て③ 自分の考えを最終決定する場を設定する。

最後に相談を通して更に膨らんだイメージマップの中から、特に探究したい課題はどれなのかを吟味した。その後の振り返りを見てみると、「やはり自分が初めに考えていたことを聞いてみたいと思う。」「友達意見を聞いて知りたいことが変わった。」というように、自分にとって探究したい思いがより強い課題を選択する様子が見られた。

(3) 課題設定後の内容

子どもたちは同じ課題ごとにグループをつくり、図書室にある資料や、インターネットを使いながら課題解決に向けて取り組んだ。その後、それだけでは解らなかったことや、調べた内容が正しいのか確かめるために、「お年寄りからお話を聞く会」を実施し、課題解決に向けて情報を収集した。その情報をもとに、グループごとに調べたことをまとめ、他のグループと交流した。交流していく中で、「昔は鉛筆削りがなかった。」といった生活にかかわることや、「風や竹馬を自分で作って遊んだ。」といった遊びにかかわること、更に「だんごやたんきりというおやつを作って食べていた。」といった食にかかわることなど、お年寄りのさまざまな生活の知恵を知ることができ、実際に体験してみたいという思いが生まれてきた。

「自分が経験したい、挑戦してみたい」という思いをもとに、新たにグループを編成して、知恵袋講習会を開いた。お年寄りから「鉛筆削り」や、「風作り」、



友達とかかわりながら、よりよい課題を見出す子どもが育つ授業



「だんご・たんきり作り」などを教えていただき体験することができた。

教えていただいたことを他の

グループにも伝えるために、体験して学んだことをグループごとにまとめた。どのグループも、お年寄りのもつ知恵や技術の素晴らしさや、それを一生懸命教えてくれる優しさに対して感謝の気持ちをもっている様子がうかがえた。みんなが似た気持ちをもっていることを確認すると、「この気持ちをおじいちゃんおばあちゃんに伝えたいなあ。」「またおじいちゃんおばあちゃんにお会いすることはできないかなあ。」という思いが子どもたちの中に生まれた。そこで、「感謝の会」を計画し、内容を話し合い実行した。「感謝の会」では、学んだことを発表したり、教わったおだんごやたんきりを作ってご馳走したり、感謝の気持ちを表したお手紙をプレゼントしたりした。

「感謝の会」の後、これからもつながっていききたいという子どもの思いをもとに、花を育てて贈る、運動会や音楽集会に招待する、手紙を書くといった、具体的な取り組みが話し合われた。この取り組みについても自分が実践したい内容をもとにグループを



感謝の会の様子

作り、計画、実行することができ、今後のお年寄りとかかわり方についても考えることができた。

Ⅳ 成果と課題

1 成果

手立て① 自分の考えを可視化する。

教えてもらいたいことや具体的な内容をイメージマップに可視化したことは、自分の考えを客観的に自覚したり、その広がりや深まりを実感したりし、自分が探究したい内容を選択する上で有効であった。

手立て② 友達と探究課題を相談しやすいように環境を整える。

友達と探究課題を相談する際、教室掲示を手掛かりに話し合う姿が見られたことから、以下の視点で環境を整えることは互いの考えがわかり、新たな気付きを生んだり、アドバイスを送る内容を明確にしたりする上で有効であった。

- 活動の様子がわかる写真の掲示
- 活動した際の子どもたちの感想
- 活動したときの対象の言葉

手立て③ 自分の考えを最終決定する場を設定する。

友達からのアドバイスを参考にして、再度自分の考えを見直し決定することにより、自分が探究したいと強く思う課題を決めることができたので有効であった。

2 課題

次の探究活動に向け、子どもにとって必然性のある課題意識をつなぎながら、単元における活動の連続性を大切に、子どもの学びが質的に高まっていくようにする。

そのために今後、探究している子どもの思いや願いを見取る工夫や、その思いや願いにそった単元計画の見直しを図り、自分の活動を見つめ直し、より深く探究する子どもの育成に努めていきたい。

新しい総合博物館として2015年4月18日オープン!

歴史・文化、自然史、アイヌ文化を網羅。

学芸副館長 出利葉 浩司

●北海道博物館って?

「北海道博物館」という名前をお聞きになって、どんなことを思われるだろうか?

「そんな博物館あったかなあ?」とおっしゃる方は、かなりの博物館「通」でいらっしゃる。実はこの『北海道博物館』は、2015年4月に誕生したばかりの博物館なのである。とはいっても、全く「赤ちゃん」博物館かというところではない。これには、長いストーリーがある。

●北海道博物館ができるまで

北海道博物館は、北海道が、道内の自然、歴史、文化について、北海道民をはじめとして、ひろく北海道を訪問されるみなさんに知っていただくという目的で「組織作り」をした博物館なのである。

むかし、北海道開拓記念館という博物館がありました…。

実は、北海道には、これまで北海道の歴史、文化を中心に展示してきた「北海道開拓記念館」という博物館があった。「開拓」「記念」というように、この博物館は、開拓使がおかれて開拓が本格化してから100年を記念し、1971年に開館した博物館であった。開拓記念とはいえ、この博物館が行ってきた研究活動や展示活動には、アイヌ民族の歴史や文化、さらには先史文化も含まれていた。明治年間以降、アイヌ民族がたどった歴史にもふれるなど「教科書に書かれていない」北海道の歴史も展示してきた。ご承知のように、北海道には明治以降、本州以南からたくさんの人々が移住してきた歴史があるが、それ以前にもアイヌ民族が作りあげてきた文化と歴史がある。また北海道西南部渡島半島には、中世以来、

本州北部から移住してきた武士団とアイヌの人々とが交易を中心としてさまざまな関係を結んできた歴史もある。開拓記念館は、いってみれば「それぞれの」歴史をもったふたつの集団の立場を代弁する形で展示を構成してきたのである。かなりの無理はあったものの、展示は概ね好評ではあった。



生き物たちの北海道



雪解けとともにオープンします

構成も、これまで北海道の歴史の流れをひとつのストーリーとして見ていただいていたが、新しい展示は、五つのトピックを設け、それぞれが独立した展示室となり、どこからご覧になってもよい展示となる。

五つのトピックは、次のようになる。

●なぜ、名称を変えたのか

しかし、全く問題を抱えていなかったわけではない。開拓記念館という名称は、移住し、北海道を切り開いてきた人々にとっては賛美すべき名称であったが、もともと北海道という大地に住み続けてきたアイヌの人々にとっては、自分たちの歴史を無視した不愉快きわまりない名称であったのである。このことは、アイヌの人々のみならず、歴史学研究者や文化人類学研究者などからも指摘されていた。

●アイヌ民族文化研究センターとの統合で、アイヌ文化研究が充実

一方、北海道には、アイヌ文化を専門に研究する機関として『道立アイヌ民族文化研究センター』がある。1994年に設立されたこの機関は、これまでアイヌ語をはじめとして、口承伝承や芸能などの無形文化を中心に、海外の博物館にあるアイヌ文化資料なども精力的に調査してきた。今回、北海道は、『北海道開拓記念館』と『道立アイヌ民族文化研究センター』を統合し、研究機能を強化して、新しく総合博物館としてスタートすべく、準備を進めてきた。

●新しい展示は、どこがおもしろいのか

博物館が研究や展示の対象とする内容も、北海道の歴史や文化だけではない。総合博物館として、自然史にも力を入れていくことになる。常設展示場の

(1)北海道120万年物語

人類が日本列島に渡ってくる以前から、開拓が本格的に始まった19世紀の終わり頃まで。

(2)アイヌ文化の世界

アイヌ語や口承伝承の部分が充実したこと。また伝統的な暮らしだけでなく、アイヌ民族が歩んできた歴史を今日までたどったこと。この2点が新しいアイヌ展示の充実点である。

(3)北海道らしさの秘密

北海道独特の景観、海や大地の資源を生かしたモノ造り、多雪寒冷な気候での暮らしなど、産業や暮らしの歩みをたどりながら「北海道らしさ」を探る。

(4)わたしたちの時代へ

20世紀以降の北海道。政治や経済、人々の暮らしは、何度も大きな変化を経験する。その延長にいまの北海道があり、いまを生きるわたくしたちがいることを、あらためて確認する。

(5)生き物たちの北海道

大自然といえば北海道の代名詞のようにいわれることがあるが、ここ百数十年の間で北海道の自然は、国内では例を見ないほど急激に変えられた。そんななかで、多様な自然環境とそこに暮らす生き物たちの「つながり」、さらに人とのかわりについて考えてみる。

* * *

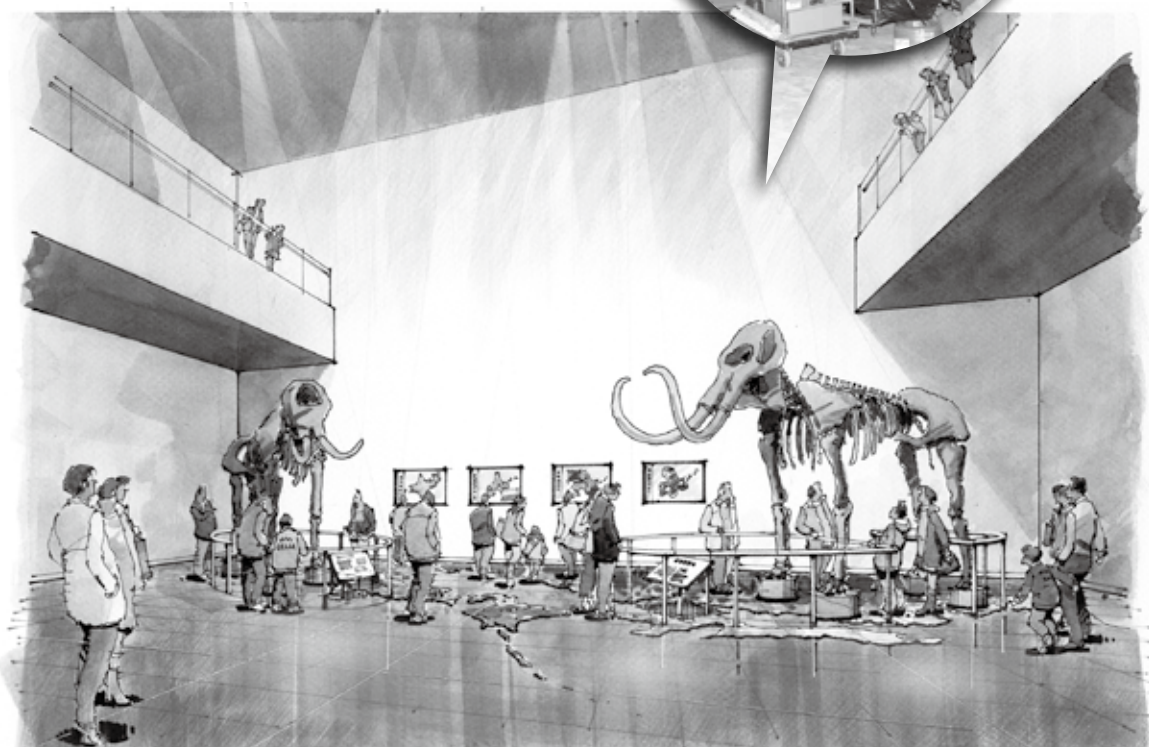
新しくなった「北海道博物館」に、ぜひ、足を運んでいただけたらと思う。

常設展示入り口では、 マンモスゾウとナウマンゾウがお出迎え

新しい展示のテーマのひとつは、「北東アジアのなかの北海道」。北海道は、マンモスゾウとナウマンゾウ両方の化石が発見された日本唯一の場所。マンモスは北から、ナウマンは南から渡ってきたと考えられており、この二体のレプリカが、人や動物、モノが行き交う北海道を象徴する。

準備中

出番を待つ
ナウマンゾウのレプリカ



プロローグ 北と南の出会い

展示品を入れ替えます

博物館の常設展示というと、「いつ来ても同じ」という印象をおもちの方もおられるかもしれない。新しい常設展示室では、展示品を入れ替える部分を設ける。北海道博物館が所蔵する資料を、特別展示だけでなく、多くの方に見ていただく機会をつくっていきたいと考えている。

展示場にはハンズ・オン展示も…

展示物をより深く理解していただき、興味をもっていただくために、常設展示室のなかにも「触ることのでき

る」展示を設ける。さらに学芸員などスタッフが直接、資料を手に説明することも、計画している。

北海道産国宝第一号 『中空土偶』(複製)も展示します

本物は、函館市臼尻町にある「函館市縄文文化交流センター」に展示されている。いまから約3000年まえの縄文時代後期のもの。本物そっくりの複製。まずは、中空土偶とはどのようなものか、その雰囲気だけでも感じていただけるのでは…。

むかしからある展示物も活かします

新しい展示といっても、なにもかも新しく造るわけではない。写真は、1971年からあるアイヌ民族の伝統的住居。当時、製作技術を伝える方をお願いして建てていただいた。いまとなつては現存する最古の家屋で「文化財」級。覆いを掛けて、新しい展示での出番を待つ。



移動作業中の
アイヌ民族の住居

アイヌ文化の世界

展示場内にもエレベーター

北海道博物館の建物できたのは1970年代初頭。当時は、いまほどバリアフリーの考え方が徹底しておらず、1、2階にある展示室を行き来するのは、エスカレーターと階段。お年寄りや車椅子の来館者も楽しく見ていただけるように、展示室内にもシースルーのエレベーターを設置。

新しくなったお手洗い

笑い話のようだが、学校の先生にとって、もう一つの関心事が、じつは「トイレ」。長い間、バスに揺られて到着した生徒さんたちが、真っ先に目指すところだからだ。新しい博物館では、男女ともトイレの数を増やし、最新の設備も整えた。

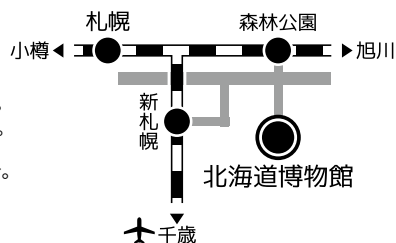
北海道博物館 札幌市厚別区厚別町小野幌 53-2 / tel 011-898-0456

特別展示やさまざまな催し物については、ホームページをご確認ください。
みなさまの来館を心よりお待ちしております。

www.hmh.pref.hokkaido.jp

アクセス:

- JR新札幌駅より
「開拓の村」行きバスで、
「記念館入口」下車、徒歩3分。
もしくは、タクシーで10分。
- JR森林公園駅より徒歩20分。



北海道博物館は、道立野幌森林公園という大都市近郊の森林公園としては世界でも最大級とされる公園にあり、園内には、明治大正年間の歴史的建造物を移築した野外博物館『北海道開拓の村』や、公園を探索する人のための『ふれあい交流館』がある。また、近郊には、考古学の展示室がある『北海道埋蔵文化財センター』や『北海道立図書館』、大学などがある。



第13回

地球となかよし メッセージ

作品募集 (2015年度)

「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたことを、
写真(またはイラスト)にメッセージをつけて表現してください。

応募者全員に
参加賞が
もらえるよ!

応募資格	小学生・中学生(数名のグループ単位での応募も可)
応募期間	2015年7月1日～9月30日 詳細は「優秀作品展示室」とあわせてホームページをご覧ください。
作品 テーマ	①身のまわりの自然が壊されている状況を見て感じたことや、自然環境 や生き物を守るための取り組み ②さまざまな人との出会いを通して、友好の輪を広げた体験、異文化交 流、国際理解に関すること ③その他、「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたこと

◎主催／教育出版 ◎協賛／日本環境教育学会
◎後援／環境省、日本環境協会、全国小中学校環境教育研究会、毎日新聞社、毎日小学生新聞
*協賛・後援団体は昨年実績で、継続申請中です。

応募の決まりなど詳しくはホームページを見てね
<http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/>



教育出版

「地球となかよし」事務局

TEL 03-3238-6862 FAX 03-3238-6887
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10

前回
入選作品



川が...

近所の川はきれいですか? それともきたないです
か? ぼくは、京都へ帰省した時に、七谷川という川へ
行きました。そこは、水がとてもきれいでうめい
でした。サワガニやヤゴ、カワヨシノボリなど、きれいな川
にしかない生き物がいました。最近、トンボが少なくな
ってきていると聞いたことがあります。川が汚れて、
ヤゴが育たないみたいです。ヤゴやカワヨシノボリ、サ
ワガニが、住みやすいこのようなきれいな川を守りつづ
けたいです。

生活科・総合通信 そよかぜ通信 【2015年 春号】2015年3月31日 発行

編集：教育出版株式会社編集局

印刷：大日本印刷株式会社

発行：教育出版株式会社 代表者：小林一光

発行所：教育出版株式会社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10

電話 03-3238-6864(お問い合わせ)

URL <http://www.kyoiku-shuppan.co.jp>



なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技
術の進展や国際化、情報化、高齢化などによっ
て、今、大きく変わろうとしています。このよ
うな社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆ
る命がのびのびと生きていくためには、人や自
然を大切にしながら、共に生きていこうとする
優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」
というコンセプトワードに込め、社会のさまざ
まな場面で人間の成長に貢献していきます。

北海道支社	〒060-0003	札幌市中央区北三条西3-1-44 ヒューリック札幌ビル6F TEL: 011-231-3445 FAX: 011-231-3509
函館営業所	〒040-0011	函館市本町6-7 函館第一生命ビルディング3F TEL: 0138-51-0886 FAX: 0138-31-0198
東北支社	〒980-0014	仙台市青葉区本町1-14-18 ライオンズプラザ本町ビル7F TEL: 022-227-0391 FAX: 022-227-0395
中部支社	〒460-0011	名古屋市中区大須4-10-40 カジウラテックスビル5F TEL: 052-262-0821 FAX: 052-262-0825
関西支社	〒541-0056	大阪市中央区久太郎町1-6-27 ヨシカワビル7F TEL: 06-6261-9221 FAX: 06-6261-9401
中国支社	〒730-0051	広島市中区大手町3-7-2 あいおいニッセイ同和損保広島大手町ビル5F TEL: 082-249-6033 FAX: 082-249-6040
四国支社	〒790-0004	松山市大街道3-6-1 岡崎産業ビル5F TEL: 089-943-7193 FAX: 089-943-7134
九州支社	〒812-0007	福岡市博多区東恵比寿2-11-30 クレセント東福岡 E室 TEL: 092-433-5100 FAX: 092-433-5140
沖縄営業所	〒901-0155	那覇市金城3-8-9 一粒ビル3F TEL: 098-859-1411 FAX: 098-859-1411